

友 定 賢 治

日本語否定表現についての研究は、例えば細川英雄氏の「否定表現関係文献分野別目録・現代語」（『日本語学』9-12）、同「否定表現関係文献分野別目録・古典語(上)、(下)」（『日本語学』10-1、10-2）によっても、その蓄積ぶりがうかがえる。これは、取りも直さず、否定表現の日本語表現中における重要性をものがたると言えよう。巻末の「まとめ」で、神部宏泰氏も「否定の表現法は、日本語の諸表現法の中でも、際立った分野を占めて存立している。」と、まず述べておられる。表現法を問題にするかぎり、必ず取り上げなければならないもののひとつである。1994年度方言研究ゼミナール(於：広島市)で、このような認識に基づいて、本巻のテーマが決定された。

早速、調査項目の作成を神部宏泰氏に依頼し、約80項目に及ぶ綿密で体系的な調査項目と、質問の文言をお考えくださった。それを広島在住の幹事(江端・町・友定)で検討し、いくらかの補充、訂正をし、再度神部宏泰氏にご検討いただいたものが、次ページに示す調査項目と質問の文言である。そして、1994年の8月18日に調査要綱と調査項目とを各県執筆依頼者に発送した。

調査・執筆の方針についてまとめておくと次のようになる。

- (1) なるべくその土地生え抜きの60歳代女性の調査を基本資料とする。
- (2) 用意された項目の順に、質問の文言どおりに質問し、その回答を記す。
- (3) 言語地理学的な研究と言うよりも、否定の表現に関する記述的な研究を意図しているのので、質問文によって得られた回答のみでなく、参考語形や使用頻度・待遇度などの注記を加えること。
- (4) 同一項目に複数の回答がある場合は、できるだけその使い分けを記す。
- (5) 位相差・場面差などにもできるだけ留意して調査する。

そして、北海道から沖縄まで、さらに中国・インドネシアを加えた52地点の、均質性の高い資料をまとめて報告することができる。今後、日本語方言の否定の表現が話題になるとき、この資料集が、まっさきに取り上げられることは確実であろうと思う。ご報告をお寄せくださった方々に厚くお礼を申し上げたい。

研究の前提となる資料は整った。この資料集を用いた研究が展開して行くことを期待したい。

1995. 12. 20 記